



乳がんは痛いのか？

乳腺外科 橋本政典



今年4月より乳腺外科に配属された橋本政典です。私は約10年間、外科全般の経験を積んだ後に20年以上乳がんの患者さんを中心に診療を行ってきました。今回はその経験から、皆さんに乳がんについて最も覚えておいてもらいたいことをお話ししたいと思います。

私はがん専門病院で診療を行っていたこともありますが、ほとんどは地域の方々が患者さんの大半を占める基幹病院で診療してまいりました。がん専門病院では既に乳がんと診断された患者さんが受診されるのに対し、地域の病院ではちょっとした自覚症状で心配になった方々が紹介されて来院されます。従って乳がんではない方も多勢見えます。

受診の理由で最も多いのはいわゆる「しこり」ではなく「痛み」です。「乳房が痛いんですが、がんじゃないでしょうか。知りあいが乳がんにかかったので心配です。」というように、痛みがあると不安になるため受診するきっかけになります。耐えられない痛み、痛み止めが欲しくなるような痛みは我々医療者が最も解決すべき症状の1つですが、乳房痛はほとんどが我慢できる範囲の生理的な痛みです。「しこりがあるかどうかわからない」という訴えも比較的多いものです。このような場合は正常乳腺が少し硬めに触れている場合がほとんどです。

このような乳房痛や正常乳腺が固めに触れるようなケースでは医師は「乳腺症」という病名をつけることがあります。この場合は病理組織学的な乳腺症とは違い乳腺になんらかの症状がある場合に便宜的につける臨床病名であり本当の病気とは違いますので気にしなくても良いと思います。

このように訴えとしては最も多い乳房痛ですが、乳がんになったら早くから痛みが出るのでしょうか。答えは「ノー」です。それどころか腫瘍が皮膚を破り見ただけでも乳がんとなるような状態になっていても痛みを感じないことが多いのです。つまり他の臓器にできるがんと同様に、しこりに気づいてからしばらく放っておいても本人はほとんど困ることはないのです。でもしこりを自覚できるほどの乳がんは、放置すると数年で骨や肺に転移し現在の医学では治せない状態

になることが多いのです。痛みがなくて困らなくても「しこり」「皮膚のくぼみ」「乳頭の変形」などの乳房の異変に気づいたら迷わず恐れず恥ずかしがらず、すぐに乳腺外科を受診してください。なんでもなくても「よかったですね。」で済みますので。

